

## タグ付けへの抵抗



### 勝又麗香

マサチューセッツ大学アマースト校高分子科学  
工学科  
120 Governors Dr, Amherst MA 01003, USA  
助教授, Ph.D. in Chemical Engineering.  
専門は閉じ込め界面における高分子物理化学.  
rkatsumata@umass.edu

<https://katsumata4.wixsite.com/home>

早いもので、米国のテキサス大学博士課程に進学するため日本を離れてから、10年以上が経った。人と異なるものの見方ができることが、研究をする上で必須条件であるのに、どうしてこうも多様性を育むことが難しいのか、経験をもとに私信を述べたい。

「〇〇(有名人)に似ているね」と言われて嬉しい人は、実は少ないのではと思う。それは、その有名人というタグあるいはステレオタイプに、自分が当てはめられたことへの嫌悪感によるものではないだろうか。実は私達は誰よりも個人として見られたいし、人と違う考え方をするのが売り物の研究者だったら、なおさら勝手にタグ付けされるのは苦痛であろう。有名人以外のタグは何だろうか？ タグ付けは、性別、セクシュアリティ、年齢、信仰、出身地など多岐にわたる。私達の脳は、効率的に情報処理するために無意識にタグ付けをしてしまう。

私は幼少の頃から女性というタグ付けに抵抗してきた。セーラームーンよりドラゴンボール、人形よりもミニ四駆の改造、スカートを拒んで野球に没頭していた。運良く私を信じて見守ってくれる両親に育てられ、高校生になってもなお、私のタグ付けへの抵抗は続いた。バンドを始め、ひたすら「女の子らしくない」THE BLUE HEARTSとHi-Standardをコピーしていたが、観客のリクエストに応えるため大塚愛のさくらんぼを演ったときは、社会の大きな何かに負けた気がした。そんな私が東工大に入り、全学部生のうちたった10%の女子学生のひとりになった。人間関係に恵まれ、楽しい大学生活だったが、とにかく何をしても目立つ。目立ちたがり屋の私ですら少し疲れた。皮肉なことに私の「女の子らしくない」性格と嗜好が男子大多数の大学に受け入れやすくてくれたという事実は、今思うとなんて不公平な生存バイアスだろう。

東工大時代、ポスター賞や発表賞などをいただいたが、その際に「女の子はオジサン受けが良いから得だよ」との言葉を浴びた。その後も複数回。そのたびに本当はそうなのではないか、と私の自信が揺らいだ。自分が異性のメンターとは夜二人きりにならないよう注意している一方で、気兼ねなくネットワーキングができる男子学生が羨ましかった。そんな中、招待講演者や

表彰される先生方は日本人男性が大多数であり、私の性格、見た目や生い立ちが似た人が、自分の就きたい職業にいるという想像ができなかった。

修士1年のとき、ひと夏の米国研究留学で私の人生は大きく変わった。初めて、女性の教授と働く機会を得るとともに、米国ではAssistant Professorでも研究室を主宰できることを知った。人と違うことが「ヘン」と言われる日本より、「Cool!」と言ってもらえる米国のほうが、私にはずっと生きやすいように感じた。お蔭で私のタグ付けに対する戦いはひと休み、テキサスでの大学院生活、カリフォルニアでのポストドクを経て、マサチューセッツにて独立することができた。

しかし、戦いはこれからだった。パンデミックが始まった頃、私はグループワークの多いリベラルなジムに通っていた。3月のある日から私と組むとなると皆、怯えた顔になり、ジムのメンバーから敬遠されるようになった。この時期は、中国がCOVID-19の発生場所とされ、中国系ならびにそう見えるアジア人は、危険と見なされた。私は、背が小さく愛想の良いタイプの人間で、取るに足らないと思われることはあっても、危険だとみなされたことは人生で一度もなかった。見た目だけで警察に目の敵にされる、米国における黒人男性の気持ちが少しだけわかり、それと同時に今まで想像力が及ばなかった、自分がされて嫌なタグ付けを自分自身がしている現実を恥じた。

時代は変わり女性の活躍が注目されているが、それは一つに過ぎず、全方位の多様性が確保される職場がより魅力的だと思う。日本では博士課程へ進学する学生が減っているようだが、博士号は世界へのパスポートであり、あらゆる国でビザが取りやすく、日本以外でのキャリアも開ける。大学教員の仕事は忙しいとはいえ、上司が実質おらず自分でスケジュール管理ができ柔軟に働きやすい。実際、私は高度不妊治療中であるが、そのことを職場や学生にオープンにしているお蔭で最小のストレスで乗り越えている。何より不当なタグ付けをされそうときや、それを見た際には声を挙げやすい、個人を尊重する現在の職場が、自由な発想を育ててくれていることに感謝し、次世代にバトンをつないでいきたい。